短歌（寄稿による）

このみちを行く

三池退職協　高椋竜生

いくさにも傷つかず炭鉱の落盤にもいくたびかあい生きのびて来し
牛肉の筋買いによくやらされし三丼が儲け太りいしころ
家一軒建つればふきとぶ退職金働くほか生きのびる術なきか
このごろになりてようやく本などを買い来て読める暮らしとなりぬ
焼酎をのめば眠たき癖の吾れに毛布と枕妻のあてがふ
天高し闘う命あるかぎりわれひとすじにこのみちを行く
年のかず餅をくわねばふとらぬという母の三十五回忌の正月
たれよりも左官日雇の日に焼けし明治の母は子のため死にき

雲海

港務指導部　松尾直吉

湯の谷の見えて息づく尾根険し追いすがるごと霧つつみくる
阿蘇頭巾といわるる霧のはれかかる径おくれじと頂上目指す
丈高き草おし分くる阿蘇越への汗さえ旅のよろこびを増す
大阿蘇の火口に近く丈ひくき虎杖は減りもせで茂りたり
火山灰の降る阿蘇谷の点景に過ぎざる櫟淡く紅葉す
霧の巻く湯の谷越えに気負いたる手の草傷がくつろげば泌む
児戯めきて不規則に噴く草かげの雀地獄は見居て見飽かず
いみじくも名付けし波野高原を越え来て遠き裏阿蘇の道
昏れ早き山のしじまに怯ゆるごと地獄見終へし歩を早めたり
起きぬけに登り来て立つ大観峰も阿蘇の五岳も雲海の上

寄稿俳句

凧揚ぐる子ら

三池退職協　高椋竜生

初刷りの新聞匂ふ大あした
タコ揚ぐる過疎となりたる社宅の子
三池闘争記を書きつづけ去年今年
暁の新年団結会案内
還暦の屠蘇なみなみと祝わるる

創作

歌おう、声高らかに

四山三池　幸子

「母さん、明日の土曜日、俺の家で忘年会をやるからな……」
仕事から帰宅した良人は、突然そういった。
「明日なの。多勢でしょう、困るわ」
私は、このあわただしい師走に、多勢の他人に家を占領されると思うと当惑した。しかし、「同じ職場分会の仲間が五人組で〝団結集会〟をひらく。それに、準備一切はみんな男同志でやってしまう」という良人の強い言葉に押し切られてしまった。会費千円、仕事を終えて五時から始めるのだそうだ……。大の男が何と倹しい忘年会だろう。
当日、私は出勤した。木枯しが吹き、寒い朝だった。申しおくれましたが、私は市内の小さな製麺工場に勤めています。子供は二人で、長女はすでに嫁に行き、末っ子は大阪の大学生です。工場の務めは三時までですが、師走はピークで残業が続いています。しかし〝忘年会〟が気になり定時に帰宅した。良人たちはまだ帰っていなかった。
「さあ―忙しいぞ」
私は、弁当箱を放り投げてすぐ掃除にとりかかった。さむざむとした社宅の部屋、ストーブを炊いて早く暖めなくちゃ……、私は馬力をかけた。
五時前、やっと良人たちが帰宅した。
「奥さん、またお邪魔します」
顔見知りの山本さんが会釈したほかの三人は初めて見る人だ。彼らは気さくに、買物した品物をテーブルの上にならべだした。〝刺身〟〝揚物〟〝キャベツ〟など、そして山本さんが漬物の〝切り干し〟を取り出したのには、思わず吹き出してしまった。酒を買った残り少ない予算で、これだけのマネジをそろえるとは、私は完全に脱帽です。
三池闘争以来十五年、あの誇り高き三池労組員が、「十円値切った」「掘り出し物だった」と、自慢しているのです。あの当時のたくましさは、あのスピリットはもうなくなったのだろうか。すっかり家庭的に軟化してしまった、良人たちの挙動を見ていると、大げさないい方だが、しみじみと風雪の重みを感じた。
結局、私が「忘年会」に介入できたのは、お酒の「カンつけ」ぐらいなものだった。そして、酔うほどに話もはずみ、歌もとびだしてくる。古い流行歌に調子はずれの民謡など、私もお義理に手拍子を打った。そんな時、良人が歌いだしたのです。
〝俺たちは栄ある、三池炭鉱労仂者、団結のきづなさらに強く……〟
それは力強い声でした。〝俺たちは栄ある〟という労働歌です。朴とつとした節回し、無口な良人の、初めて聞く大声でした。私は思わず身をのりだしていました。それをきっかけに、山本さんたちは次から次に、労働歌を合唱しはじめたのですが、さすがに迫力が違い、雰囲気が盛り上がってきました。しかし、一、二曲のほかは、どの歌もところどころの文句にしかなりません。そこで私は一旦中座し、机の引き出しから〝文集、三池の闘いの記録〟を探し出し、用紙に〝三池の主婦の子守唄〟、〝炭鉱の子〟〝炭鉱の娘〟など、なつかしい自分たちで作りだした労働歌を書き写し、大きく壁に貼りつけました。
良人たちは喝采して迎え、その後は、隣りの吉田さん夫婦も飛び入りなどし、全員で大コーラスになり、いやが上にも盛り上がりました。
私は久しぶりに充実した気分にひたりました。本当に、大声をはり上げて労働歌をうたうということは何年ぶりだろう。一つひとつが、団結の闘いの記録につながりたのしかった青春の思い出が、鮮やかに蘇ってくるのです。
私たちは、毎日が本当に忙しい。そして疲れる。だが、こんなすてきな労働歌が身近にあって、それを大声を出してうたうことによって、そんなモヤモヤを吹きとばすことを忘れ切っているのではないでしょうか。
「燃やせ三池の火の柱、広がれ国のすみずみに。カアちゃんたちの正しさが、勝利の朝をよんでいる……」
これだと思う。生活と生命を守る闘いに明日はないのである。
私は、良人たちとスクラムを組み、「労働歌」を合唱しているうちにうれし涙がこぼれたことを忘れまいと思う。生活は貧しくとも新労にはない、心からうたえる労働歌を身近かにもっている私たちは、本当に胸をはって誇りにしていいと思います。

火花

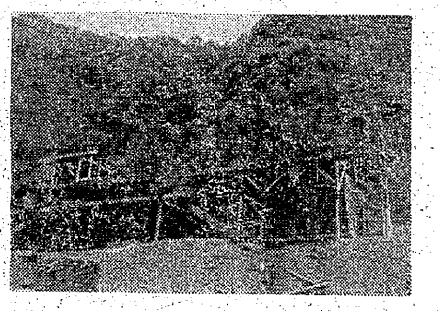
実践を通して知りました団結の勝利

宮崎　丹波徳明

三池労組の皆さん、明けましておめでとうございます。
私は、自治労宮崎県本部西臼杵郡衛生組合職員労働組合の、一組合員です。
昭和四十六年五月四日に、今の仕事につきました。
衛生組合は、一部事務組合といって、地方自治法に規定する特別地方公共団体で、西臼杵郡内三カ町で運営しています。
私達の組織は、四十八年四月単独労組の西臼杵郡衛生組合職員労働組合（組合員二十六名）としてスタートしました。
初代書記長に自分が選出され、何の方向性も見出せないまま運動を追求していたのでした。
何かしなければ、と思っていたところ、〝まなぶ講演会〟が労働大学の荒牧先生を招いてとり組まれました。それに参加して、全電通の仲間がいきいきと生活している理由が〝まなぶ運動〟にあったことがつかめ、雑誌〝まなぶ〟を読み出しました。
その頃私は、家では田植え、水の見まわりといそがしかったし、夜の二時ごろ起きて田んぼに水を入れに行かねばなりませんでした。
帰って少し寝て仕事に出かけ眠い目をこすりながら衛生組合の仕事をしていました。
それでも〝まなぶ〟を購読する前までは、俺は人よりよけいに仕事をしているんだ、人ができないことが俺にはできるんだ、という気持が強かったのが〝まなぶ〟を購読しだしてから変ったのでした。いや、自分がこれまで生きてきた姿勢はどこかがおかしい、と疑問をもつようになったのです。
そういう中で社青同にも入り学習していくうち、俺の生きがいはこの道にしかない、となってきました。
集塵の仕事をするうちの組合員は学歴がない、年令が高く、字も思うように書けず、単純な仕事しか出来ず、従って賃金も安く、しっかりした身分の保障もなく、ただ当局のいうことをそのまま「もっともだ」、とうけとって仕事をしてたのです。
しかし、社青同の運動をし、〝まなぶ〟の活動をつづけていく中で、身分保障を獲得しなければならない、賃金も上げなければいけない、作業環境も改善していかなければならない、という自覚をもつようになり、組合員にはかって要求をきめ、当局にそれをつきつけていきました。
二カ月も伸ばされたあとやっともつことができた団体交渉でしたが、結果はゼロ回答しかひきだせない現実でした。
これではいけないということになり、同じ自治体に働く労働者で組織している自治労に加盟し、統一行動の中で学習し、闘い、その力で要求を勝ち取ろうと組合員に働きかけ、その年の十一月一日県本部中央執行委員会の決定をまち、私達の自治労加盟が正式決定をみました。しかし、四月十九日の統一行動の前日になり、突然組合執行部がたがたになり、組合員の動揺が始まり、「こげな組合は解散した方がいい」ということになり、一票投票の結果、僅少の差で組織は守られましたが、形だけの組合でしかなくなりました。
組合がこうなった結果については、自分なりの組織活動の仕方がまちがっていたと思います。俺についてくればすべてが正しい、俺の言っていることはまちがいないんだ、と。
さいわい去年――昭和五十年二月十九日に臨時総会を開き、新執行部は、西臼杵郡衛生組合職員労働組合は①人夫さん達の定数化と労働条件の改善、②協約締結――をめざす運動方針を提案、万場一致で可決。さっそく当局に要求を提出し、団交申しいれを行いましたところ、当局は「団交に応じられない」ということで、自治労宮崎県本部の指導にもとずき地労委提訴の準備をしていきました。
しかし組合がまたがたになったのです。当局の、知人や地域や部落の有力者などを通しての悪質な攻撃によるものでした。
私たちは、組合員の家庭を訪れて、職場の話、法ではこうなっているのに当局はやっていない、なぜ賃金袋はうすっぺらなんだ、それに自分達だけがなぜ差別されなければならないんだ――と話し合い、訴えてゆきました。
こういったオルグ活動を展開する中で、組合に残った二十三名で頑張り、ついに去年の四月下旬団体交渉をもち、若干の問題点はありますが、人夫さん達の職員任用を勝ちとることができました。
組合員、特に私は大きな確信を得ることができました。分裂はさせられたけれども、本当に労働者こそ主人公なんだ。団結すれば必ずいつかは勝利する、という確信を。
私達は今後はもっぱら団結の質的向上をはかり、学習し、討論しながら衛生組合の全労働者を統一へと導いてゆく努力をつづけてゆく決意です。三池の闘いに学び、大衆路線・長期抵抗の闘いを追求していきたいと思っています。

×

右の手紙を寄せてくださった丹波徳明さんのお住居は、「宮崎県西臼杵郡日の影町末市」です。みんなで、連帯のはげましをおくろうではございませんか。



ここにはまた土呂久公害を生んだカマの跡も残されている。